

99. AREA CALIBRATION を利用した脾 シンチグラムの検討

弘前大学 第1内科

富田 重照 小松 良彦 鹿野 真勝
佐藤 東

〔結論〕

脾シンチグラフィーは脾の全体像を最も容易に描記できる手段として利用されて来たが、診断が困難な症例に遭遇することが多い。最近11例で脾走行範囲に、AREA CALIBRATION を利用し、従来の方法と比較検討した。

〔検査方法〕

前処置を行わず、体位は約10度左側挙上仰臥位、軽度の骨盤高位とした。 ^{75}Se -セレンメチオニン $150\mu\text{Ci}$ 静注し、ポラロイドフィルムおよびオッシロスコープにて、脾走行を確認したのち、撮影を開始した。

使用した検出器は Nuclear Chicago 製 (Pho/Gamma III), 1000孔の平行多孔型コリメーターを用い、AREA.

CALIBRATE, push button を利用し、脾走行範囲に相当する作図を得、SCALER B にて 1.0×10^5 dots の露出を行なった。この間の所要時間は約60分である。判定に利用した記録はフォトスコープを用いて撮影されたX線フィルムである。

〔成果および結論〕

AREA CALIBRATION を使用しなかった ^{75}Se -セレンメチオニン $200 \sim 250\mu\text{Ci}$ 静注症例では、診断の全く困難なものおよびやや困難なものが41例中23例53%で半数以上であった。これに対して、AREA CALIBRATION の利用例では、取り込みが悪く診断困難なものが11例中1例のみであった。この症例は脾癌の疑いにて開腹し組織学的に脾炎の診断をえている。

^{75}Se -セレンメチオニンは半減期が121日と長く当然被曝線量が問題となる。

今回われわれは、 $150\mu\text{Ci}$ と比較的少ない量で満足すべきシンチグラム像を得ることが出来た。この方法は所要時間が60分であるという欠点はあるが、脾の形態学的診断法としては従来の方法と比較しすぐれている。